

GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

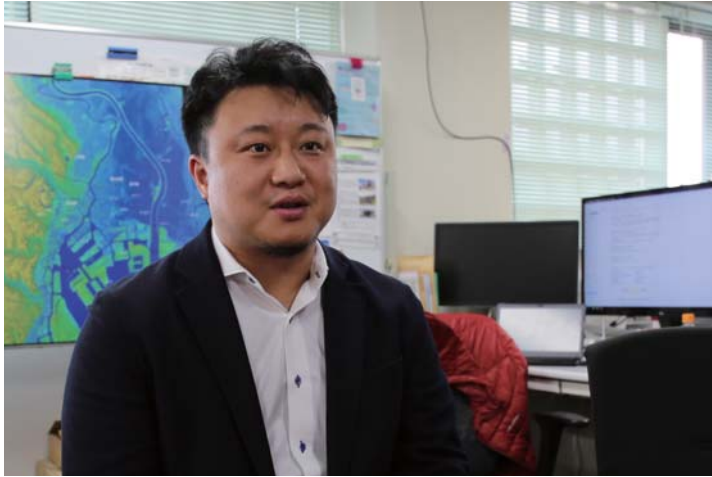


No. 52
2019 SPRING

社会心理学から災害を分析し、その記録と教訓を残す

関谷直也 准教授

情報学環総合防災情報研究センター(CIDIR)の関谷先生へ、
現在の研究や社会心理に興味を持ったきっかけなどについて伺いました。



— 初めに、研究テーマについて教えてください。

災害や環境問題の報道など、メディアでの情報伝達とそれを受ける人びとの心理、社会心理が専門です。2011年以降は、ほぼ東京電力福島第一原子力発電所の事故についての研究が中心になっています。もう一つは、自然災害の研究。大きな水害や地震があった時には調査研究をしています。特に人びとの避難行動など、情報伝達と人の心理に関わるところが専門です。今はこの2つが大きな研究テーマです。

— 「社会心理学」に興味を持ったきっかけは？

中学2年だった1988年に、当時の担任の先生が「ダンボール集めるぞ！」とか「空き缶集めて洗うぞー！」と言って、ボランティア活動を始めました。私も最初は何気なく「まあやるか」と思ってやってたと思うんです。ただ、その時にものすごく覚えているのが、周りの人の反応が冷たかったこと。「先生に気に入られたいの？」と仲のいい友達から言われたり。建設会社に勤めていた私の親からも、「お前は俺の仕事を否定するのか」と…当時は建設会社イコール環境破壊ですから。

今、研究しているから分かるんですけど、1988年というのは、ちょうど地球環境問題が言われ始めた頃なんです。その前に起こっていたヨーロッパの北海での越境環境汚染、86年にはチェルノブイリの原子力発電所事故があって、88年はアメリカの異常気象の熱波。その後のバルディーズ号重油流出事故。それらを誘因として、88年から89年にかけて世界的にもものすごく報道量が増えた。要するに、日本での環境問題の報道というか、環境問題に対するメッセージの投げられ方が一番盛り上がった時期です。

それで、ボランティア活動を始めて1年程したら、「いい事やってるよねー」みたいな感じに周囲の雰囲気が変わった(笑)。その1年間で世の中の人の感覚が変化していったんです。私は環境問題そのものよりも、そっちにすごく違和感というか関心を覚えました。だから、改めて大学院で勉強をしようと思った時に、人びとの心理の動きというか、メディアやコミュニケーションに関わることは前提

として、世の中の雰囲気ががらっと変わってしまうようなこと、そこを研究したいと思いました。

— 福島第一原子力発電所の事故についての研究がメインとのことですが。

東日本大震災が起こった時、私は原子力事故の歴史から風評被害のことを研究したり、JCO臨界事故や柏崎・刈羽原子力発電所のトラブルなど原子力事故のことを研究したりしてきたはずなのに何もできなかった。災害研究として、何も残せてきた知見ってなかったんだなあと思いました。しかも、もともと原子力事故の研究からスタートしていたはずなのに、事故が起こった時の対応ではなくて、いつの間にか放射性物質の影響がない経済被害の研究、風評被害の研究をしていた。災害研究者のくせに、ファーストプライオリティではなく、セカンドプライオリティの研究をずーっとやってたんだなあ、というのが私としてはものすごく反省でした。

なので、今は放射線量が下がってきて風評被害の部分も多いのでその研究もありますけど、直接的に被災を受けた地域の、解除されたけどなかなか住民が戻ってこない浪江町の対応や、事故直後の被災した12市町村それぞれの行政対応や避難の問題、住民がどういう思いを抱えていたのか、経済被害や放射性物質による被害がどれだけの社会的混乱をもたらしたのか、そうした事柄を色々なかたちで丹念にみていくというのが今の研究の中心です。

世界中に原子力発電所は約450基あるので、また事故は起こり得る。なので、この記録はちゃんと残さないといけない。その教訓は原子力事故に限らないと思います。数十万人が避難した災害というのは、東京電力福島第一原子力発電所事故というか東日本大震災だけなんです。今、思っているのは、とにかく出来るだけ東京電力福島第一原子力発電所事故に伴うこの放射線災害をきちんと精緻に色々な角度からみていけば、多分次に起こる大規模災害のさまざまな課題が見えてくるだろうということ。その上で、被害を受ける社会の側というのはそれほど変わらないのだから、その時の対応をどうすればいいかっていうのも、おのずと考えられると私は思っています。

— 出張も多そうですが、普段どのような生活を送られていますか？

週、1、2回は出張しています。今は福島と新潟がほとんどです。東日本大震災から時間が経って、みんな興味を失っている。福島にいけば福島大学とか福島県内に一緒に研究をしている人や、話せる人が多いので、向こうに行って調査をしたり、飲んだり、議論をしている方が多いですかね。取って置かないと対象からずれてきちゃうので……と、最初は意識的に行っていましたが、でも、今は出張にいらっているのか、飲みについているのか……。よくわからないです(笑)。

高校生のための 東京大学オープンキャンパス

2018年8月1日・2日に「高校生のための東京大学オープンキャンパス2018」が開催され、情報学環・学際情報学府は8月1日に参加しました。今年度は、情報学環オープンスタジオを会場として、テクノロジー×アートの展覧会である「東京大学制作展Extra2018“Dest-logy”より5つの作品が展示されました。参加者体験型の作品が多く、作品を説明する大学院生の話術もあいまって、高校生がメディアアートに引き込まれていました。また、情報学環教育部がパネルを展示し、研究生が常駐して教育部の紹介を行いました。会場の一角では、学際情報学府全6コースの大学院生を主演とした、インタビュー形式のビデオも上映されました。高校生にとって大学院は遠い未来かもしれませんが、生の声を聞ける良い機会だったと思われまます。

記事：三宅弘恵(准教授)



挑戦！ロボットプログラミング！

2018年8月2日・3日の2日間、情報学環オープンスタジオにて小学生を対象としたロボットプログラミングワークショップを開催し、文京区内の小学校に通う小学4年生から6年生の子どもたちが参加しました。このワークショップでは、「もし〇〇ならば、△△するデジタルマールマシン」をテーマに、ボールが転がる装置であるマールマシンをチームごとに自由制作してもらいました。ボールがマールマシンから落ちてしまったり、ロボットが上手く動かなかったりする部分を何度も調整して成功したときには、参加者の小学生はもちろん、大人まで一緒になって喜び、会場は大変盛り上がりしました。小学生たちが自由な発想を活かして楽しみながら作品づくりに取り組む姿が見られ、有意義なワークショップとなりました。

記事：阪口紗季(特任研究員)



留学生旅行 「小千谷市 牛の角突き観戦」

2018年11月4日、国の重要無形民俗文化財に指定されている「牛の角突き」観戦のため、留学生22名と教職員5名で遠く新潟県は小千谷市に日帰り旅行に出発しました。闘牛場に到着すると、観客席はすでに多くの人々で埋まっていました。取り組みは一つ一つ説明もあり分かりやすく、1トンもの闘牛の角突きはさすがの迫力でした。伝統文化や民俗学を研究され、学生・留学生委員で自らも角突きの牛を一頭所有しておられる菅先生も、地元の勢子を務める人達に溶け込んでとても生き生きと横綱牛の綱を引いておられました。時々歓声をあげて、皆初めての角突きに興奮と満足の2時間を過ごしました。短い新潟滞在ではありましたが、普段交流の無い学生達が勉学を離れてネットワークを作ることができ、それぞれに楽しい思い出のできた充実の一日でした。

記事：村田玲子(学務係)



日韓台シンポジウム 「RISK, MEMORY AND DEMOCRACY」

2018年11月16日・17日、日韓台シンポジウム「RISK, MEMORY AND DEMOCRACY: Key Communication Issues in East Asia」が台湾の国立政治大学にて開催されました。東京大学情報学環とソウル国立大学言論情報学科、そして国立政治大学コミュニケーション学科それぞれの教員・学生が参加しました。1日目の学生による発表では、ソーシャルメディア、ジャーナリズム、エンターテインメント、女性史、教育史、司法、災害情報など、多彩なテーマが取り上げられました。質疑応答では、参加者それぞれの研究分野に立脚した質問がなされ、研究の発展に向けてさまざまな観点からの着想を得ることが出来たようでした。2日目には、インターネットによるテレビ番組の配信事業を行う台湾のベンチャー企業、Choco-TVの見学が行われました。

記事：松田英子(助教)



広島テレビ新社屋 「記憶の解凍」展覧会

2018年11月23日～12月2日、広島テレビ新社屋にて「記憶の解凍～カラー化写真で時を刻み、息づきはじめるヒロシマ～」展を開催しました。「記憶の解凍」とは、白黒写真を人工知能技術で自動カラー化することをきっかけに、対話の場を生み出し、過去の記憶を未来に継承することを目指す試みです。「かつて4400人が暮らした繁華街。そこにあった平和な暮らしが、一発の原子爆弾によって永遠に失われてしまったこと。こうした事実から、平和の大切さを多くの人に感じてもらいたい。」広島女学院高等学校の庭田杏珠さんのこのような思いが源流となり、この展覧会が実現しました。会期中には3500人以上の人々が訪れ、ワークショップやシンポジウムも開催しました。会場中央に据えられたテーブルでは、被爆者と市民の語らいの場が生まれていました。

記事：渡邊英徳(教授)



石田英敬教授 最終講義

石田英敬先生の御退職を記念した講演会が2019年3月13日、福武ホールにて開催されました。石田先生は、1992年の東京大学教養学部へのご着任以来、駒場では、総合文化研究科にて、言語情報科学専攻、また、本郷でも、情報学環・学際情報学府の設立にご尽力され、その後、2009年から2012年までは、情報学環長・学際情報学府長を務められました。福武ラーニングシアターで行われた最終講義は、「文明の療法としてのメディア記号論」と題され、石田先生のこれまでの大学人としての歩みを振り返るだけでなく、今後の展望を垣間見せるもので、150人以上の参加者が興味深く聴講しました。また、講義後には、ラーニングスタジオにて祝賀会が開催され、大いに盛り上がりました。

記事：西 兼志(成蹊大学教授)



CONGRATULATIONS

平成30年度大学院学際情報学府秋季学位記授与式

9月14日、福武ホールラーニングシアターにおいて、学際情報学府の秋季学位記授与式が行われました。故郷から駆けつけたご両親、ご家族、そして友人達に見守られながら、修士課程10名、博士課程6名の修了者に、田中学府長より学位記が授与され、その後学府長と中尾専攻長より祝辞が送られました。



平成30年度秋季入学式・ガイダンス

9月19日、福武ホールラーニングシアターにて、学際情報学府の2018年度秋季入学式および入・進学ガイダンスが行われました。今年は修士課程15名、博士課程6名が出席し、それぞれの希望と夢と緊張が入り混じる新たなスタートを切りました。

(学務チーム：村田玲子)

合格発表

2月19日、平成31年度修士・博士課程入試(2019年4月入学)の合格発表がありました。出願者数は修士課程104名、博士課程40名でした。最終合格者数は表の通りです。



冬季入試・修士課程合格者数

文化・人間情報学コース	5名
総合分析情報学コース	7名
合計	12名

冬季入試・博士課程合格者数

社会情報学コース	7名
文化・人間情報学コース	8名
総合分析情報学コース	3名
合計	18名

着任教員自己紹介

山川雄司 講師

流動教員として生産技術研究所から参りました。ロボティクスを専門としており、特に人間を超える高速ロボットを開発し、その応用として人間とロボットとのインタラクションや、柔軟物のマニピュレーション等を研究しています。また、ロボットの認識系として、高速カメラネットワークシステムの構築およびその応用にも取り組んでいます。


松田英子 助教

総合文化研究科池上高志研究室、The University of Sussex等を経て着任しました。「文字や音に対して、色や形の印象を感じる」などの、共感覚という認知現象を切り口として、子どもの発達について研究しています。心理学・言語学・文学を始め様々な分野と関係があり、学環の皆様と領域を超えて共同研究が出来たら嬉しいです。

人事異動
[教員]

平成30年9月1日付

昇任

沼田宗純 准教授

平成30年11月30日付

配置換(転出)

中野公彦 准教授 流動元(生産技術研究所)へ

平成30年12月1日付

配置換(転入)

山川雄司 講師 生産技術研究所より

平成31年3月31日付

配置換(転出)

鶴田 啓 教授 流動元(史料編纂所)へ

石田英敬 教授 定年退職

石川 徹 教授 退職

斎藤正徳 特任講師 任期満了退職(出向元へ)

東 由美子 特任講師 任期満了退職

会田大也 特任助教 任期満了退職

[事務職員]

平成31年2月18日付

受入

鈴木和子 派遣職員

平成31年3月31日付

任期満了退職

岩間なつみ 事務補佐員

海野智子 事務補佐員

岡田美保 事務補佐員

受入終了

久保美和 派遣職員


BOOK

メディア判例百選 第2版

著者名:長谷部恭男 編/山口いつ子 編/穴戸常寿 編

発行年月:2018年12月 出版社:有斐閣

メディアの現在を規律し、その将来を方向づける重要判例124件をコンパクトに解説。取材/報道の自由・情報公開・名誉毀損・プライバシー・著作権等の多彩な争点を取り上げ、新聞・放送・インターネットなどの媒体特性を踏まえながら時代に応じた準則を探る本書は、判例分析の醍醐味と学際的な魅力を併せ持つ。電子書籍版も配信。(教授:山口いつ子)


社会制作の方法

著者名:北田暁大

発行年月:2018年11月 出版社:勁草書房

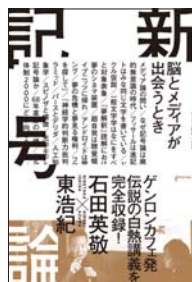
本書は私が院生の頃から、つい最近にまで至る理論系の論文を収録したものです。昔の論文を出すのは恥ずかしい限りなのですが、社会学の基礎をなす「行為論」について、「転向」も含めて私が20年ぐらいのあいだに考えてきたことをリミックスしてみました。20年前の自分との対話の書です。(教授:北田暁大)


狂気—文明の中の系譜

著者名:アンドルー・スカル、三谷武司 訳

発行年月:2019年2月 出版社:東洋書林

原書は2015年刊行。原著者の狭義の専門は18世紀以降の英米圏における精神医療体制の変遷だが、本書は原書副題に「聖書からフロイト、癡狂院から現代医学に到る狂気の文化史」とあるとおり斯界の第一人者による通史である。読者は古今東西の様々な史料や文学作品を渉猟した高密度の叙述とカラー44点を含む全130点の図版を通じて「狂気の歴史」の最新知見に接することができる。(准教授:三谷武司)


新記号論 脳とメディアが会うとき

著者名:石田英敬、東 浩紀

発行年月:2019年2月 出版社:ゲンロン

情報学環で「情報記号論」を19年間講じてきた私が東浩紀さんのゲンロンカフェで行った講義をもとに書いた著作。21世紀の情報メディア社会を理解するためライブニッツに遡って記号論をつくりなおし、スピノザやフロイトを読み直して現代思想をヴァージョンアップする試みです。スリリングで熱いトークとなっています。(教授:石田英敬)

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>

あとがき

小学校プログラミング教育が2020年度より必修化されます。子供時代に「パソコンばかりやっていないで少しは勉強しなさい」などと叱られながらもプログラミングに熱中していた世代としては、まさに隔世の感があります。社会人向けのリカレント教育の動きも加速していますし、学環でもさまざまな取り組みが行われています。子供が学ぶ場合も大人が学ぶ場合も、強調したいのは「プログラミングは楽しい」ということです。自分で作ったプログラムがようやく思い通りに動いたときの嬉しさは格別です。この嬉しさは知的にも高度なもので、MITのシーモア・ババート教授は"hard fun"と表現しています。情報教育に携わる一員として、ぜひ多くの方にプログラミングの楽しさ、深さを知っていただけたらと願っています。(暦本純一)

GAKKAN 52 4. 2019

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

編集委員: 暦本純一、水越 伸、渡邊英徳、David Buist、岡田美保、潘 夢斐、城 啓介、福嶋政期、鳥海希世子

デザイン: MARUYAMA DESIGN 丸山智也